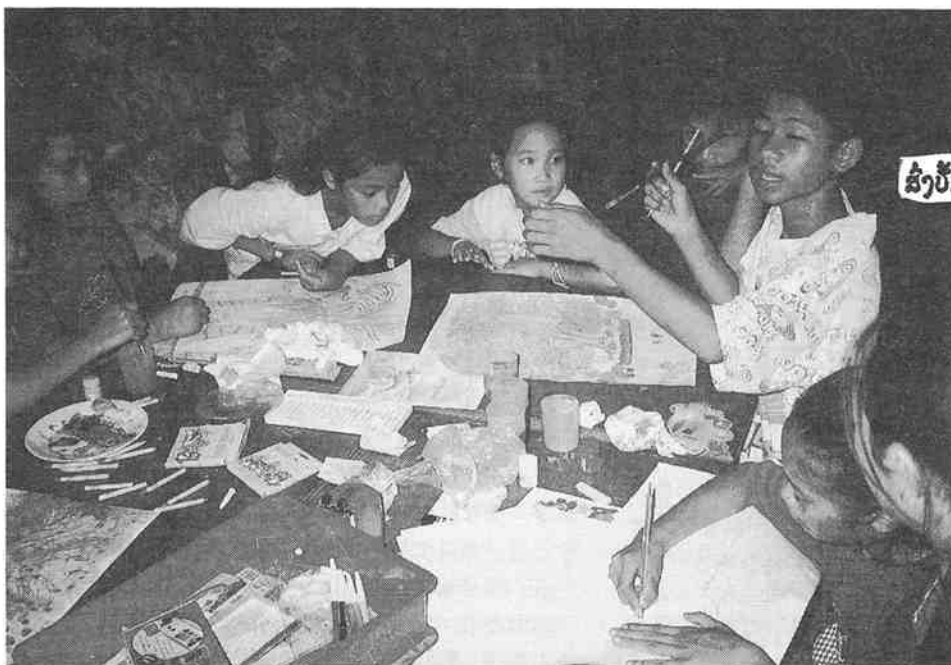


ラオスの子ども通信 13号

(1999年3月発行)



配布セミナー密着レポート

1998年11月14日-12月6日

小川直美

今回の出張の目的は、ボリカムサイ-カムワン-サワンナケート3県への「絵とき辞書」「移動図書館」の配布プロジェクトの視察です。わたしにとって初めての現地出張なので、さらに次のような目的をつけ加えました。

- ・ラオス事務所スタッフとの親交を深めること
- ・移動図書館を設置している学校や、学校図書室を支援した学校をたくさん見てくること。
- ・子ども文化センター(CCC)のプログラム、とくに絵画教室を見てくること
- ・日本のNGOのスタッフやJICA関係の日本人に会い、ネットワークをつくること。

3県への配布は1週間の日程ですが、これらの目的のためヴィエンチャン滞在を約2週間延長し、

合計約3週間の出張となりました。

●THE FOUR WOMEN 「絵とき辞書」キャラバン

11月16日~21日

国立図書館から運転手付きで借りたピックアップトラックに、印刷があがったばかりの「絵とき辞書」第4版を積み、国道13号線を南へ南へ。クルーはASPBの出版顧問ドゥアンドゥアン(DD)さん、国立図書館員のオンターさん、ASPBのソンペット姐さん、トーキョーのオ・ガワ(わたしはラオスではこう呼ばれた)。めざすはボリカムサイ、カムワン、サワンナケート。

各県では、まず教育委員会で打合せをし、配布内容の確認などをしたり、最新の学校数を教えて

もらったりする。配布計画作成時と比べ学校数はどんどん増えているので、各校に1冊ずつ用意した「絵とき辞書」は足りない。不足分はあとで印刷所から直接各教育委に送ってもらうことにする。カムワン県では、ノンボック郡の30の小学校に移動図書箱と紙芝居も配る。

わたしたち4人は、真っ白な国立図書館の車で参上し、教育委員会に乗り込み、教育長らと会話し、セミナーでは次から次へとよくしゃべり、本を渡して、さっそうと去っていく。サワンナケートで学校を視察しているとき、オンターさんがわたしに英語でささやいた。

「この教育長ったら、わたしたちのこと、
”THE FOUR WOMEN”ですって」

11月16日 ポリカムサイ
11月18日 カムワン
11月20日 サワンナケート

●移動図書箱・図書袋
配布セミナー

配布は、県の中心都市に周辺から学校長などが集まり、使い方などのセミナーを受けてから持ち帰るシステム。

セミナーは、こんな内容で進められる。

1) DDさんがレクチャー

ASPBの支援システムについて、辞書の有用性と使用方法について、子どもたちへのストーリーテリングの大切さについて熱弁をふるう。

2) 辞書や図書箱の贈呈

今回は、図書箱といっしょに「ラオスのかみしばい」と、国立図書館から音楽テープと歌本が手渡された。読書推進活動のためにつくられた、楽しく本を読みましょう、といった歌らしい。

3) 実務の講義

国立図書館のオンターさんによる実務的な内容の講義。図書箱の管理方法、使用方法、貸出ノートと貸出カードのつくり方、本の補修方法、報告書の書き方など。

貸出方法は、セミナー参加者から代表が出て、先生役と生徒役に分かれ、実際にやってみる。補修も実技をやってみる。チャレンジしてくれた参加者には、国立図書館から絵本を贈呈。

4) ストーリーテリング=おはなしの実演

オンターさんは紙芝居「いほがえるとにわとり」や、絵本の読み聞かせなどを披露。わがソンペットさんも、フランネルシアターを実演。

”The four women”



5) 参加者が実演

今度はみなさんが、おはなしを聞かせてくれませんか？そんな呼びかけ(たぶん)に応じて、シャイな校長先生が黒板の前に進み出、おもむろに「おはなし」が始まる。声は朗々、緩急自在、よく知られた定番らしく、聴衆も相の手を入れたり、盛り上がる。お礼に絵本を贈呈。

6) 感想、質問、意見交換

「絵本の読み聞かせは、子どもを学校に惹きつけるのに役立つ」「学校に来ない子どもも来るようになる」という声は各県で聞かれた。この場で、いろいろなリクエストが出ることも多い。図書室をつくりたいとか、子どもに絵を教えたいのに画材がないとか。ソンペットさんは、学校名とリクエスト内容を書いてASPBに送るようになったのんでいた。

さて、トーキョーから来たオ・ガワは、ただ見学していただいただけではない。ASPB代表として英語でスピーチをし、贈呈式では辞書を手渡す。しいにはソンペットさんに「せっかく来たんだから日本のストーリーテリングを」と言われ、ASPBから持参した日本の絵本を渡されてしまう。ラオス語の翻訳が貼られているので日本語が読めないその絵本を使って、ぶっつけ本番、日本語で「読み聞かせ」にチャレンジ。「おおきなかぶ」はロシア民話なんだけど...

11月20日

●学校図書室支援の候補校を視察

サワンナケートでのセミナー終了後、教育委員

会の職員の案内で市内の4つの学校を見て回った。

- ・サワンナケート高校：図書室があり、司書もいるが、閉架式。フランス語の古い図書が中心で、ラオス語のものは少ない。新しく図書館をつくりたいと考えている。
- ・サマキー小学校：職員室に図書箱があった。91年にユニセフが配布したものだが、数年前から貸し出した様子がない。今の校長は新しく赴任したので、使い方がわからないという。図書室よりも、まず図書箱の活用が有効のようだ。
- ・ボンサワン小学校：読書室兼課外活動室のような教室があり、図書箱が丁寧に、活発に利用されているようだ。ここで絵かきや粘土細工などの活動も行われている。別の教室に先生全員が集まっていて、DDさんが鞆時で本の話をした。
- ・ボンサワン中学・高校(一貫校)：図書室はあるが、設備も蔵書も古そうだ。蛍光灯など図書室の維持費のために、生徒は年間500キップ(ちなみにコーヒー1杯は700キップ)の会費を払って利用する。100人以上が登録しているという。この4校の中では、サワンナケート高校は準備が整っており、図書室開設支援の優先順位は高いというのがわたしたちの一致した見解だった。

●セミナーを終えて

こうして、3か所でのセミナーを終え、最後のサワンナケートの夜、宿舎の一室に4人が集まり、反省会を行った。

ソンペットさんによると、セミナーを受けた校長や読書担当教員が人事異動で替わってしまうと、図書箱の利用度が低下する傾向にあるという。読書推進活動への理解や活用ノウハウが新しい担当者引き継がれず、途切れてしまうようなのだ。

これに対してわたしが思いついたのは、先生ではなく子どもたちのほうに「図書委員会」のようなものを作ったらどうかということ。先輩から後輩に読書活動を伝え、新しい先生には子どもたちの側から使い方を教えるようになったら、それが読書クラブみたいな活動につながっていったら...と想像はふくらむ。

わたしがセミナーを体験して気になったことは2つある。

ひとつは、どの会場でも各校からのリクエスト

が雨アラレのように寄せられること。本が欲しい、画材が欲しい、図書室が、あれが、これが、欲しい、欲しい。

そのまま要望をもらう前に、ASPBの支援の考え方や、力(資金力)の限界を理解してもらう必要があるの

ではないかと思った。学校に、本や資金が足りないという問題があったら、まず課題を整理し、いろいろな方策を検討し、そのうえで必要な支援を要請する、といった問題解決への道筋を示唆するというのも、ひとつの支援のあり方といえるのではないかと思う。いわば読書活動コンサルタント、学校コンサルタントだ。

もうひとつの気になる点は「おはなし」のこと。ストーリーテリングは、日本から持って行く前から、ラオスの人たちが当たり前楽しんできたことなのだろう。校長たちの「語り」の達者なのを見て(ラオス語はわからないけど、達者な感じはわかった)、そう思った。その「おはなし」にだって、子どもを学校に惹きつける力があるはずだと思う。今度は地元の語り名人にセミナーのゲスト講師をやってもらったらどうだろう。

ソンペットさんは、来シーズンの配布には、ASPBの若手スタッフを交代で連れて行きたいとも言っていた。それはとてもいいアイデアだと思う。セミナーは、教育現場からの直接の情報収集の機会でもあり、その意味では双方向の学びと交流の場だ。わたしも今回のプロジェクトに同行して、地方の学校の様子を見たり、先生たちの熱心さに接して、勉強になったし今後のこともいろいろ考えた。ラオス事務所の人々にも、そのチャンスがあるといい。



●学校図書室 "Hak Arn" Room

"ハクアーン" はラオス語で「愛読」という意味。ASPBが支援している図書室はハクアーンと呼ばれ、入り口に通し番号のついたプレートが掲げられている。

ヴィエンチャン市内で4つのハクアーンを見せてもらったが、それぞれ独自に工夫して運営しているのが印象的だった。曜日ごとに利用する学年を割り振って、休み時間に開放しているところ、毎日放課後に低学年に読み聞かせをしている先

あるハクアーンの入り口に貼られた注意書き

- 1.入るときは先生に言いなさい。
- 2.入るときは、シャツのすそをズボンやスカートにしまいなさい。
- 3.しずかに。
- 4.読み終わったら、もとに戻しなさい。
(黙って家に持ち帰らないこと)
- 5.借りたいときは、ネームカードを見せて手続きしなさい。

生、校長が熱心で掃除までしている学校など。また、担当の先生が土曜日にボランティアで絵や歌を教えたり、小学校が休みの日は近くの中学校の生徒に開放したり、と活動の幅が広がっている。学校図書室が地域の読書活動の拠点になっていったらいいと思う。

ある学校では、図書室ができて、それまで学校に来なかった何人かの子どもが来るようになった、と言っていた。これもひとつの、ひょっとしたらとても大きな、「ハクアーン効果」なのかもしれない。

●謎の大自然

ラオスの子どもたちがどんな絵を描いているのか、興味があった。ちょうど九州の矢部村が、世界の子どもが描いた木の絵を募集している。

11月28日、CCCの絵の先生、コンレーさんとわたしたちは、近くのお寺に木の写生をしに行くことにした。29人もの子どもに、緑、赤、青、黄、白のポスターカラーが2組、12色くらいのクレヨン、茶色の水彩チューブが1本。サインペンが少し。

お寺には、菩提樹と椰子の木がある。好きな木を描くことにした。ところが、何人かの子どもは、違う絵を描いている。中央を青い川が流れ、遠くに緑の山脈があり、真っ赤な太陽が光る原色の風景「タマサー」だ。

タマサーは、ラオス語で自然のこと。子どもはよくこの絵を描く。これは何？と聞くと「タマサー」と答える。どこのタマサー？と聞くと、答えられない。やっぱり「タマサー...」なのだ。

タマサー事情は、ポリカムサイCCCでも同じ。いったいこの風景は何なんだ。日本人にとっての「富士山に松」みたいなもの？ラオスの銭湯にはタマサーが描かれている？（注：いまのところラ

オスに銭湯はない）

さて、子どもたちは、菩提樹のくすんだ緑の葉っぱや、椰子の木の向こうの薄曇りの空に取り組んでいる。いいぞ、いいぞ。しかし、見せてもらおうとすると「ボー・ンゲーム」と言って背中に隠してしまった。「ンゲーム=きれい」の否定、「きれいじゃない」。ショックだった。

これはわたしの想像だが、子どもたちにとって「きれいな絵」は、原色のタマサー画や、ポスターのカラフルな絵のことなのだろう。

木や葉をよく見て微妙な色を作りながら描いているこの絵、いいのになあ。「ボー、ボー。ンゲーム・ラーイ」ちがうちがう、とてもきれいだよ。ほんとは、もっといろいろ話がしたいのに、ここがいいね、と教えてあげたいのになあ。

それにしても「タマサー」の正体は...？

●ヴィエンチャンの日本社会とNGO社会

「ラオスの子どもと女性を支える会」は、チャントソンが世話人の一人になっていて、言ってみればASPBの姉妹団体みたいなものだ。その「支える会」がヴィエンチャンに建てた職業訓練センターに、友人の土屋麻利子さんが駐在している。

彼女はASPBスタッフとも仲がよく、センターが休みのときは、事務所を手伝ったり、スタッフの相談にのったりしているらしい。

今回、彼女の紹介で、ヴィエンチャンで暮らすいろいろな日本人の方に会うことができた。

その中で浮かび上がったのは、ASPBはラオスの日本人やNGOのネットワークから、こぼれ落ちそうになっているのではないか、という心配だ。

ある人と会ったとき、こんな話が出た。「12月5日は参加しますか？」JICA、UNDP、日本人会の企画で、国際ボランティアの日にメコン河沿いの道でゴミ拾いをするという。わたしもソネットさんも全く知らなかった。

この情報は2つのチャンネルで流れたらしい。日本人会と、ラオスNGOダイレクトリー掲載団体だ。両方から、あるいはどちらか一方から、関係団体にファクスで連絡が回っていた。

ASPBは日本人駐在がいないから、日本人会と直接のつながりはない。しかも、ラオスNGOダイレクトリーにも掲載されていない。これは何と

かしなくては、と思った。

ラオス人スタッフが現地活動を運営するという ASPBの方針に共感するし、スタッフとは同僚という対等の関係で働きたいと思う。日本人不在のデメリットはあるが、ラオス人による運営のメリットを活かしていけばいいとも思う。しかし、そうは言っても、日本人社会やNGO社会とのつながりも大切だ。やはり、日本人スタッフが必要なかもしれない。

●ラオスと東京、近くなったり遠くなったり

ある日、となりの店でカフェラオを飲みながら、チャンシーさんがポツリと言った。

"I am very tired. But, I like this work."

そうなんだ。ラオス事務所も仕事量が増えて、みんな疲れているけど、きっとチャンシーさんと同じ気持ちで、がんばっているに違いない。この時、わたしたちは遠距離だけど、職場の同僚なんだな、と強く感じた。

いっぼう、ソンペットさんやポーケオさんとは、もう少し突っ込んだ仕事の話にもなる。そんななかで、少しずつラオス流の仕事が見えてきた。印刷費用などの見積りのとり方に、両国の"仕事文化"の違いを感じたり。ひとつひとつ行動は早いけど、全体の戦略はあまり考えないらしい、とか。もっとも、戦略や方針は、わたしたちから説明して共有していなければならぬのだが、こういう「考え」を正確に伝えるのは、とても難しい。それに、東京で日々行われている議論なども、リアルタイムで共有化したい、となると、やはりラオス語のできる日本人スタッフの常駐というプランが浮上してくるのだろうか。

終わりに

3週間もの出張を許可してくれた東京事務所のみなさん、出張中ファクスやメールで東京からバックアップしてくれた赤井さん、わたしがいない間の事務所の仕事をサポートしてくれたボランティアのみなさん、ことばもろくに通じないオ・ガワにつきあってくれたラオス事務所のみなさん、そしてヴィエンチャンや各地でお会いした日本のみなさん、土屋さんには、ほんとうにお世話になりました。この経験は、東京の仕事に必ず活かしていきたいと思います。

◆ラオス事務所スタッフからのメッセージ◆

「日本の支援者のみなさまへ」

ソンペット

いつも応援してくださっている、個人・団体・財団・企業などすべての日本の方々に、ヴィエンチャンASPB、ラオスの子どもや関係部署に代わって心からお礼を申し上げます。

私は、読書推進活動に参加できることがうれしく思うと同時に誇りに思っています。この活動はラオスの子どもにとってとても必要なことで、大事な仕事です。というのは、ラオスの子どもには読む本が不足しているからです。どの学校も、休み時間に読み物がありません。この活動のおかげで、子どもたちは本を読む機会が与えられ、本の好きな子どもに育つことができます。なかでも、様々な方々や団体より送られてきた日本の民話(ラオス語に訳された本)を読む機会も得られたことは、よかったですと思います。

またCCCIは、歌、踊り、伝統楽器、語り、いろいろなゲームなど、ラオスの子どもたちがさまざまな文化活動ができる場として素晴らしく、貴重な贈りものです。これらの活動はラオスの子どもたちの全面自己開発を促し、正しいことを表せる勇気を持たせることができ、また子どもたちに伝統芸術、文化を愛し、守っていく心を育てることでしょう。

それと並行して行われている図書袋、図書箱の配布、様々な学校に図書室「ハックアーン」を設置することは、僻地にいる子どもたちに本を読むチャンスを与えることになり、国の将来であるこれらの子どもたちに、一般教養を身につけさせることができます。

しかし、今日になっても本の配布はまだまだ不足しており、たくさんの方が図書室を必要としています。日本のみなさまには、今後とも、出版、図書袋、図書箱、子ども文庫「ハックアーン」への援助を続けてくださいますようお願い申し上げます。

親愛なるみなさまの幸運と幸せをお祈りして。

1998年12月ラオス出張報告

子ども文化センターの現状と人材育成の課題。

野口朝夫

今回の出張は、国際建設技術協会からの支援によるヴィエンチャン特別市CCCの開設調査が目的でした。あわせてポリカムサイ、ルアンパバンのCCCでもインタビューを行いました。

■ヴィエンチャン市CCCの目的■

ヴィエンチャン市教育委員会サイトーンさんの考えるCCCのイメージは、次のとおり。

先生の育成、教育技術向上の訓練センターの機能を持つ施設を考えている。500校に図書室作りた。そのためには司書の養成が不可欠。しかし現在の先生は、本をどう扱っていいかわからない。

そこで司書(本を扱うことのできる先生)の育成にある。また同時に子どもと接する技術などを教えたい。設置する図書室は先生だけのためのものではなく、近所の小中学生をも対象にしたい。

■ポリカムサイCCCの活動状況■

[図書室] 火曜～日曜(月、金休み)

- ・10時から午後3時頃まで子どもたちがくる。1日約50人。中学生は読書。小学生は読み聞かせが中心。新しい本がくると子どもも増える。
- ・貸し出しは1人1冊4日間。貸し出しは名前、本をノートに記入。誰にでも貸し出す。まだ本の貸し出しのシステムが理解されておらず、返却されない本も多い。手続きをして借りる子はきちんと返す。
- ・小学生は絵本を読み、読み聞かせの輪に入る。中学生は昔話や政治関係の本の利用が多い。
- ・今年はラオス語の本のみが補充され、あまり人気がないとか。
- ・中学生で大勢で来て勝手に持ち帰って返さない子がいる。持ち帰るのは、それを売ということではなく、本を読みたいが友達が見せてくれないから、親兄弟に見せたいなどの理由のよう。

[教室] 土・日曜のみ開催(無料)

- ・音楽教室・伝統舞踊教室(初級、上級)
- ・絵画教室・ゲーム教室・昔話教室

小学生と中学生、40～50人が来る。とりわけ中学2年生が多い。6～8月の夏休み期間は8時～4時の特別プログラム。絵画教室 折り紙教室 国語教室、数学教室など開設。1日に300人以上が来てスペースが足らなくなることも。そのため踊りの練習などに古い建物を使っているが雨漏りがして困っている。

■ルアンパバンCCCの活動状況■

[教室] 4時～6時。伝統舞踊、歌、絵画の人気の高い。講師は全部で14名。

月-----歌 絵画 お話 織物

火-----歌 英語 ラオ語ゲーム 編み物

水-----歌 絵画 竹細工 織物

木-----伝統舞踊 英語 ラオ語ゲーム

編み物

金-----伝統舞踊 絵画 伝統音楽 織物 お話

土 午前---歌 ゲーム ラオ語ゲーム 英語

竹細工

午前---伝統舞踊 編み物 お話 伝統音

日曜-----休み

・ルアンパバン地区25全部の小学校の子どもが来る。送り迎えする親も。

・小学校1～2年は「お話」教室、伝統舞踊や歌の教室は中学生のみ。

・英語教室には小学生が来て、大人気(ルアンパバンには英語学校が1校。中高校では英仏を選ぶ。80%が英語を選択)。子どもの数は増え、朝から来て図書室で時間をつぶす子もいる。

[図書室] 教室に人気をとられてしまった感もあり。今回、会から305冊を届けたが他のCCCに比べ冊数がきわめて少ない。

●ルアンパバンCCCの設立から1年間がたって

・5月にルアンパバン地区の歌のコンテストを開催。150人が参加。1等賞金は10万キップ。貧しい子どもが来るので、賞品は現金がよいとのこと。教育委員会が先生を派遣し、学校で歌を教えている。伝統的な歌は、曲は古いものを用いつつ、詩は新しくなっている。優勝した子はヴィエンチャンでの全国大会でも1等だった。

・CCCができて、子どもたちの放課後の楽しみになった。週に2回、TVで活動を紹介しているため、認知度が高く参加希望者は多すぎるほど。

・フェスティバルの時などは、親や地元の企業も支援してくれる。

現在、次のような案が出ている。

◆CCCの周りに塀を作りたい。現在敷地上で飼っている山羊が、草を食べに降りてきて、せっかく植えた草花を食べてしまったり、「悪い」子どもたちが裏庭で賭サングラ投げをしたり、困っている。また、道路側に子どもが落ちる心配がある。そこで、道路側にコンクリートと木で、裏の崖上には鉄製の塀を設けたい。

◆子どもが多すぎ、現在の教室では充分でなくなっている。新たに、伝統舞踊の練習場兼外部の人にショーを見せたり、セレモニーができるような、屋根だけが付いた新しい建物が欲しい。この施設で催しものを開催し、CCCの運営財源としたい。

◆歌のコンテストをまた開催したい。ルアンパバンではとても熱心に教えられている。

◆木彫のクラスを始めたい。

●ある日の様子

4時過ぎから子どもたちが集まり始める。それ以前には図書室にもほとんど人がこない。火曜日だったが伝統舞踊、英語、ゲーム、機織りの教室が開かれていた。

伝統舞踊には先生が来なかったのか、皆外で隣の図書館のスタッフが講師であるゲームのクラスに参加。いささかたわいがない遊びに見えたが、皆、キャッキョと楽しそう。昔のわれわれのフォークダンスの時間の雰囲気。中学生が中心。

英語の先生が遅刻してくる。子どもたちは熱心であるのに。

機織りは、生徒が3人と少ないこともあり、先生

がきちっと教えていた。

いずれにしても日本の子どもより、自主性があり、年長者、あるいはリーダー格の子どもが、先生の不在時間を管理している。

それぞれのクラスの活動時間は、せいぜい45分程度のもので、あっという間に終了。もっと長時間、密度の高い活動はできないものかと、こちらとしては随分物足りない思い。ブンコンさんにとってCCC活動は、エリートを育てるものではないとはっきりしており、誰でもを受け入れるのが彼の方針とのこと。1年前より、自信が出てきていることを感じる。

■出張を終えて--人の育成こそが課題

痛切に感じたのは、会としてCCCの活動目標、存在意義をどう設定し、共有化するのかをハッキリしなくてはいけない時期に来ているということでした。CCCは徐々に活動が安定し、子どもの数も順調に増えています。他県でもCCC新設の動きがあるようです。しかし、その「質」が気になりました。

子どもたちにとってCCCで過ごす「時間つぶし」のひとつは、家事などに拘束されないレクリエーションの時間であり、現在のラオスではとても大切です。が、それだけでは物足りないと思います。英才教育をめざすわけではないけれど、もっと子どもたちの満足度、「質」の高い時間を提供するやり方があるような気がしています。もう少し、目的性、達成目標のはっきりしたプログラムであり、子どもたちへの「積極的な働きかけ」といって良いかもしれません。

CCCは何を活動の目的とするのか？ 特別な人の才能を伸ばすことか、普通の子どもに「楽しさ」を提供することか？ ソンペットの意見は後者であり、私たちと共有をしています。一方、CCCスタッフや講師は、どう理解しているのか。私たちの意思伝達、共有が十分でなく、いささか不安になりました。

ハッキリしてきたのは、会の活動目標が「人」の育成にあることです。CCCの役割、CCC自体の人材育成について、私たちはもう少し意識を高める必要があると感じさせられた出張でした。

★CCCでは、うたとおどりをなっています。発表会にも出ました。いろいろな県からたくさんの子が来て、友だちがいっぱいできました。とても楽しかったです。幼稚園の子に民話を読んで聞かせたら、喜んでくれました。(チュリー チャルーンスック/4年生)

★毎週CCCにきています。むかしはうたがへたでしたが、今は上手になりました。(スリタ ヴォンサイ/5年生)

★CCCでおどりをなっています。発表会に、母さんもよろこんでくれて、わたしもうれしいです。CCCにはたくさんのお色えんぴつがあって、絵を描いています。(トゥーンティダー インタヴォン/5年生)

★CCCでお話を聞いたり、本を読んでいます。やったことのないゲームもします。妹も大きくなったら連れてきたいです。私は大きくなったらおどりの先生になりたいです。(ブッサディー インタヴォン/4年生)

★学校が休みの日にCCCに来ます。おどりや絵を描きます。いっしょうけんめい練習して、姉さんのように歌の発表会に出たいです。妹も来たがりますが、母さんがまだ小さいからといえます。(ベンチャイ ペンドアン/3年生)

★前は弟だけがCCCに通って、歌を習っていて、よく聞かせてくれました。私もCCCに通うようになって、弟のように習っています。先生は民話を聞かせてくれます。(ビムマソーン ファンタヴォン/4年生)

★CCCでよく絵をかきます。ゲームもやります。民話の本を読んだあと、お父さんとお母さんに話しました。どこで覚えてきたのと聞かれ、CCCで読みましたと答えました。(トッカター/3年生)

★民話をききます。夜、大きな車にのって、おどりの発表をしました。お父さんも見に来てくれました。(プッタワン/1年生)

★ほかの県にもCCCがたくさんできるようになって欲しい。なぜなら、多くの友だちと、いろいろな活動をして、交流ができるからです。もっ

とほかの県に見学に行きたいです。(ニパーポーン ヴォンパシット/中2)

★CCCができて、いろいろな活動ができるようになって、私も、親戚もいいと思っています。もし、CCCがなかったら、自分が何をしていたらろうと、想像もつきません。日本人の友だちもできました。表現する自信もできました。(ワッタナー/中2)

★もっと多くのCCCができれば、ラオスの子どもに表現する自信を与えてくれると思う。(シソムポーン インタラード/高1)

ボリカムサイCCC

ブンルート・シヴィサイ館長より

子どものために空き時間を利用したさまざまな活動ができる場をつくりたいというのは、長年の願いでした。

子どもたちは、幼いときから文化的活動とともに、知識、礼儀などを身につけ、地域社会からも評価を受けています。

「CCCは
好きですか」
子どもたちに
聞きました。

東京事務所の動き (98.11~99.2)

11月 6日 JANIC(NGO活動推進センター)事務局長会議に
森が出席
7日 やべみつのりさんの講演会でラオスの紙芝居上演
(クレヨンハウス)
8日 運営会議
14日-12月6日 小川がラオス出張
14日 ボランティア活動日
20日 葛飾区ボランティア貯金推進協会総会
赤井が活動報告
21日・22日 曹洞宗国際ボランティア会「新宿アジア祭」
でラオスの紙芝居上演
22日 青少年育成国民会議セミナー参加者が来訪
23日 ラオス語新刊絵本編集検討会
24日 運営会議
28日 ボランティア活動日
29日 やべみつのりさんの講演会でラオスの紙芝居上演
(クレヨンハウス)

12月 5日 ボランティア活動日
9日 運営会議
11日-19日 野口がラオス出張
13日 運営会議、忘年会
14日 チャンタソンと赤井が国際開発救済財団を訪問
19日 ボランティア活動日
20日 運営会議
25日-1月13日 チャンタソンがラオス出張
27日 大掃除
28日-1月6日 年末年始の休み

1月 7日 仕事始め
10日 運営会議
13日 日本青年会議所・東海GTS委員会
プロジェクト打ち合わせのため来訪
16日 ボランティア活動日
23日 ボランティア活動日
27日 日本青年会議所・東海GTS委員会
プロジェクト打ち合わせのため来訪
28日 『文字絵本3』の打ち合わせ
わかやまけんさんとドゥアンドゥアンさん
運営会議
30日 ボランティア活動日
30日-31日 全国スタディツアー研究集会
小川、野崎が参加

2月 1日 黒柳徹子さんを表敬訪問
ドゥアンドゥアンさん、チャンタソン、赤井
(『窓ぎわのトットちゃん』ラオス語版の出版準備中)
3日 日本青年会議所・東海GTS委員会
プロジェクト打ち合わせのため来訪
5日 若手NGOスタッフの集い 赤井、小川が参加
6日 ボランティア活動日
8日 東京ガス大田支社を訪問 赤井、小川
9日 アーユス新春の集い 赤井が参加
14日 運営会議
NHK新アジア発見「村に本がやってきた」放送
20日 ボランティア活動日
27日 外務省NGO支援セミナーに赤井が参加
ボランティア活動日

●1月の運営会議で話し合ったこと

- 1) 99年度の活動の方向性を次のように確認しました。
 - ・ 出版、図書箱、図書袋、学校図書室の支援は、98年度と同じくらいの規模で継続する。
 - ・ 図書補充費不足をカバーするため、日本から翻訳貼付絵本を送る活動を充実させる。
 - ・ CCCでのこれからの情操教育支援のあり方を考えるため、保育、音楽、身体表現などの専門家にネットワークを広げ、勉強会などを行う。
 - ・ ラオスで絵本制作者を育てるための創作コンクールを開き、新人への門戸を広げるとともに、絵本の基礎的な編集技術などの向上もめざす。
 - ・ ラオスへ積極的にメンバーを派遣し、情報や意志を共有化する。

2) 助成金の申請内容の検討が行われました。

- ・ 国際開発救済財団：図書箱・図書袋の配布とフォローアップ事業費
- ・ 地球市民財団：絵本制作者育成事業として、絵本づくりハンドブックの制作費、絵本コンクールの開催費と優秀作品の出版費用

●2月の運営会議で話し合ったこと

1) 図書運搬のための車(トラック)を調達する。
これまでではその都度車を借りたり、市内ならトックトックで対応していました。しかし配布時期には地方への出張も多く、「図書を届ける」には不可欠なものです。自前の車があれば機動力が増し、プロジェクトも進めやすくなるでしょう。

2) ラオス事務所にコピー機を導入する

これまででは、その都度スタッフがコピー屋にバイクを走らせていました。しかし最近では現地会計など、ある程度現地事務所に事務を移管し、各種計画書や報告書の作成など全体の業務量が增大しています。こうした日常業務の効率化のために必要と判断しました。

**ラオス事務所の自動車、コピー機について、
ご支援くださる方・団体を求めています。**

◆NHK新アジア発見「村に本がやってきた-ラオス・ソプターン村」(2月14日放送)で、図書袋配布活動が紹介されました。通信12号の送付状でお知らせしましたが、たくさんの方が番組を見てくださったようです。東京事務所には、電話や振込用紙のメッセージ覧、電子メールなどで、感想が寄せられています。「現地の様子がよくわかって、遠かったラオスが身近になった」「絵本を手にした子どもたちがほんとうにうれしそうで、よかった」といった声に、わたしたちも励まされています。

お知らせです

●ラオスのお正月●

「サバイディー・ピーマイ・パーティ」

日時：4月18日(日)午後1時受付開始

1時30分より4時30分まで

会場：東京ガス大田支社4階ホール

京浜急行線「京急蒲田」駅徒歩1分

JR線「蒲田」駅徒歩10分

参加費：一般4000円(チラシまたはこの通信

ご持参の方は2名まで、一人3500円)

高校生2500円、中学生以下は無料

*参加費には、ラオスの子どもたちの教育支援活動のためのご寄付が含まれます。

今年もおいしい手作りラオス料理をたくさんご用意してお待ちしています。みなさまお誘い合わせの上ぜひお越しください。お申し込みは東京事務所まで。

TEL/FAX 03-3755-1603

●ピーマイ・パーティお料理ボランティア大募集●

お料理が得意な方、ラオス料理に興味のある方、パーティー料理の手伝いをしながら、本場ラオス料理が覚えられるかもしれませんよ。

4月17日(土)午後 東京ガス大田支社4階厨房

で仕込み、18日(日)当日朝9時から調理。

*パーティ参加費のボランティア割引があります。詳しくは東京事務所・赤井までお問い合わせください。

●あなたの手で、あの子の手に。

「絵本2000冊運動」にご参加を！●

すでに「絵本ネットワーク」という仮称でご案内してきた、日本の絵本にラオス語の翻訳を貼って送る運動のタイトルを「絵本2000冊運動」に改めました。内容は変更ありません。ラオスでの図書補充費の不足を補うため、たくさんの方のご協力をお願いしたいと思い、目標数字をタイトルにしました。2000年をめざして、という意味も込めています。2000冊という数字は、仮に全て図書箱に詰めたとしても15箱分くらいの量です。キャッチフレーズは「あなたの手で、あの子の手に」。参加ご希望の方は、絵本リストと説明書をご請求ください。

●外貨募金にご協力ありがとうございました●

通信11号で募ったところ、98年12月までに10件のご寄付をいただきました。ドル、キップ、パーツはそれぞれ8.25\$, 2250K, 1591.5Bで、ラオス事務所の活動費として使わせていただきます。

他の外貨は日本円に両替して、2372円でした。東京事務所の活動資金として大切に使わせていただきます。ありがとうございました。なお、両替できなかったコインは、その国で活動している他のNGOなどに寄付させていただきます。

●東京事務所ボランティア・スタッフ募集●

5月から7月までの3か月間、スタッフの赤井がラオス事務所に派遣となります。これに伴い、4月以降東京事務所の日常業務をサポートしてくれるボランティアスタッフを募集しています。

- ・パソコン(Windows)できる方を希望します。
- ・無給ですが交通費は実費支給します(1日上限1500円まで)。
- ・週1-3日程度できる方。曜日は相談に応じます。会議やイベントのため、土日も出ていただくことがあります。
- ・期間は4月から7月まで。以降も継続できる方歓迎します。

●スタディツアーが変わります●

97年、98年の夏、ラオスの子どもたちとの交流やNGO活動体験を目的に実施してきた、ASPBのスタディツアー。今年は現地プロジェクト参加型のツアーに衣替えする方針です。実施時期も、いろいろなプロジェクトが動く乾季(だいたい11月、12月、1月ごろ)を考えています。

ところで、みなさんは、どんなスタディツアーに行ってみたいですか。会では、これから企画を考えるにあたり、みなさんからのご意見を参考にしたいと思います。ファクスやハガキなどでお寄せください。

●土曜日はボランティア活動日です●

これまで、定期的なボランティアの集まりがなかなかできなかったのですが、10月から、毎週土曜日をボランティア活動日として事務所で集まれるようになりました。午後1時から、会計や名簿などのパソコン入力、資料などの郵便物発送、翻訳絵本の整理などの作業をしています。徐々に、チームを作ってイベントやホームページの企画などもやっていきたいと考えています。

社会人の方にも参加しやすくなったと思いますので、どうぞ気軽に事務所をのぞいてみてください。なお、来られる時は、前日までにご連絡ください。

※第2日曜日の前日はお休み

●99年度・前半の予定(99年3月14日現在)

- 4月 日本青年会議所(JC)東海GTS委員会のスタディツアー(ラオス)受入
- 4月 18日 サバイディー・ピーマイ・パーティ
- 5月 6日-29日 専門家派遣セミナー
- 6月 13日 総会
- 7月 通信14号発送

*変更になることもありますのでご了承ください。

指 定 募 金 の ご 報 告

「寄付のいろいろ」でご案内した「指定募金」に、これまでたくさんの方々のご寄付をいただきました。ほんとうにありがとうございました。

	募金総額	のべ口数	寄付者・団体数
絵とき辞書	351,100円	440	48
	318,800円①	400	55
移動図書館	266,800円	13	5
図書袋	46,000円	4	4
学校図書室	600,000円	4	4②
紙芝居	60,000円	10	11

①97年11月までの受取分(新聞掲載などによる)
②学校図書室への寄付4件のうち1件は99年度の開設支援

募金総額は必ずしも口数に1口金額を掛けた金額ではありません。募金などで集まったお金をそのままくださる場合の端数なども含まれるためです。

『絵とき辞書』第4版

■2175校に配布

当初は、2000冊を印刷し、9月末頃完成する予定でしたが、その後、印刷所で機械が故障したりして、印刷が遅れてしまいました。そのため配布のスケジュールも順延されてしまいました。為替レートの変動や追加のご寄付によって、最終的に2500冊印刷することができ、昨年11月に合計2175の小・中・高等学校に無償配布いたしました。残りの325部につきましては、次回の配布まで、ASPBLaos事務所にて保管させていただきます。ご支援ありがとうございました。

■配布地および配布部数(1校に1部ずつ配布)

ボリカムサイ県	343部
カムワン県	581部
サワンナケート県	1,251部
合計	2,175部

移動図書館・図書袋

■「箱」「袋」合わせて160校に配布

指定募金に加え、郵政省国際ボランティア貯金および国際開発救援財団からの助成により、全部で120の図書袋(60校分)と100の移動図書館(100校分)を製作。図書袋には約70冊の本を、移動図書館には約140冊の本を収納し、合計160校に届けることができました。今回配布総数は2万2400冊にのびます。

■配布校の地域別内訳

配布地域	図書袋	図書館	合計
ヴィエンチャン市	—	36	36
カムワン県ノンボック郡	—	30	30
サヤプリ県ムアンビエン郡	4	6	10
サヤプリ郡	26	20	46
シェンクワン県ムアンカム郡	30	8	38
合計	60	100	160



学校図書室(子ども文庫)

■8校開設、通算33校に

98年10月から99年1月にかけて、ヴィエンチャン市をはじめ、ルアンパバン県、サヤプリ県、シェンクワン県などの合計8校に学校図書室を開設することができました。これで、ASPBLaosが支援する学校図書室"Hak Am"は全国で33か所になりました。これらの学校図書室には今後も必要に応じて図書の補充などフォローアップをしていきます。また、この夏、全国の学校図書室"Hak Am"担当者がヴィエンチャンに集まり、読書推進活動の報告や情報交換を行い、現状を評価するための会議を行う予定です。その成果は、今年度以降の学校図書室の支援に反映させていきたいと思っています。

■ご支援いただいた方と学校(いずれもヴィエンチャン市内)
村井浩 ノンブアトーン小学校 "Hak Am" No.26
豊島福祉基金 シーカイ中学校 "Hak Am" No.27
東京海上火災保険(株)東京自動車損害サービス部
ノンサヴァン小学校 "Hak Am" No.28

(敬称略)

紙芝居

■移動図書館といっしょに配布

指定募金10件のほか、98年4月から12月までの間にのべ187名の方に「ラオスのかみしばい」をご購入いただきました。ありがとうございました。

指定募金と販売の収益、それに活動資金からもプラスして紙芝居を買い取り、ラオスへ306組を送りました。著者に1組ずつ贈呈したほか、98年秋から移動図書館といっしょに各地の学校に配布しています。

*「ラオスのかみしばい」(3巻1組6000円)は引き続きお求めいただけます。ご希望の方は東京事務所にお申し込みください。(送料:640円)